

沖縄は 海と空でできている



第1話 偶然見つけた天然の水族館

ジョージ・スギーニー
GEORGE SUGENEY

間違えて降りた島は天然の水族館だった

2002年 夏

ゝボーーーーッ、(船の汽笛)

「上杉さん...、気持ち悪いです。なんか...吐きそうです」

高速船の甲板上で、小湊が青白い顔をして話しかけてきた。

小湊は前の職場の後輩で、違う会社に移った今でも夜な夜な飲み歩いている仲だ。

「出航して2分で船酔いか？」

「いや...、昨日飲み過ぎですよ。ホテルに帰ったの朝の4時ですもん。それで今朝は7時起きですよ？普通に酒が残ってますよ」

何故か少し怒り気味で話してくる。

「何で怒ってるんだ？」と言い返したいが、ゝ二日酔いの原因は上杉さんだ、という目で見られていて、薄っすらではあるが思い当たる節があって言い返せない。

確かに昨夜は呑んだ。

待ちに待った沖縄だったのでつつい羽目を外してしまった。

確か昨夜の23時頃だっただろうか。

那覇市内の居酒屋で小湊と飲んでいた時に、

「そろそろ帰りませんか？」

と言ってきた。

しかし私は、

「沖縄の夜はこれからだろ」

そう言って更に呑み続け、その後も何軒かハシゴした。

その結果ホテルに帰ったのが朝の4時というわけだ。

だから私も酷い二日酔いだ。

ゝ昨日23時頃に帰りたいと言ったのに、朝方まで呑んだのは上杉さんのせいだ、と本当は言いたいのだろう。

それにしても小湊は弱音をすぐに吐くし愚痴が多い。

彼が喋る話は8割が愚痴だ。

主に仕事の愚痴が多い。

それは相手が私に限らず、合コンの時にも女子に仕事の愚痴を吐いている。

3日前の合コンでも、

「もおー、月曜日は朝から電話が鳴りっぱなしで大変なんだよお」

と言っていた。

土日が休みの会社はたいてい月曜日は大変だ。

なのに彼は自分だけが悲劇の主人公の如く語っている。

私が、「月曜はみんな大変なんだよ」と言っても、「いや上杉さんは僕の仕事を知らないから」と言わんばかりに更に大変さをアピールしてくる。

彼は不動産関係の仕事をしている。

なので比較的大きな金額を動かす事が多い。

ゝ自分は大きなお金を動かしているから仕事が大変なんだ、とアピールしたいらしい。

だから合コンでレスポンスが良い女子がいると、

小湊:「もお大変でさあ」

♡:「へっ、そうなんですね。小湊さん凄いですね♡」

小湊:「もおホント大変。この前もさあ……」

♡:「ウツソー、そんな事までえ？」

小湊:「そうなんだよお、もお大変なんだからあ」

♡:「すご〜い」

こういう時の私は、たいてい遠くを見ながらタバコを吸っている。

こんな、話の8割が愚痴の男だがどこか憎めない所があり、付き合いはもう6年になる。

「上杉さん、甲板は暑いから中に入りませんか？」

「いいけど中で吐くなよ」

「大丈夫です。戻しそうになっても口の中でせき止めて飲み込みますから」

「それは俺の視界に入らない角度でやってくれ」

中に入ると、これでもかと言うぐらいエアコンがフル回転していて、外との気温差のせいで冷凍室に入った感じだった。

今日は波が高いから船がよく揺れる。

二日酔いに追い討ちをかける様に前後左右に揺さぶられ、客室へ繋がる急な階段を、振り落とされないように一段一段慎重に降りていった。

なんとか下まで辿り着くとそこは客室の中央あたりで、階段を挟んで後ろ側の座席(船尾側)に目をやると、人でビッシリと埋まっている。

空席が2〜3席あるだけだ。

それに比べ前の座席(船首側)はガラガラだ。

何か理由があるのだろうか。

座っている人を見ると、後ろ側は黒く日焼けした地元の人が大半で、前半分は色白で半袖Tシャツ。

どう見ても観光客だ。

う〜ん...、これだけ明暗がハッキリしていると後ろ側に座るのが正解のようだ。

しかし正解に座っては、なぜ前の席が不正解なのか分からない。

ヨシ、ここは敢えて不正解を選ぼう。

どうせならという事で一番前の列に座った。

船は高波により激しく揺れていたが、寝不足と二日酔いには勝てずあつという間に眠っていた。

出航して30分位が過ぎた頃、激しい揺れで目が覚めた。

波は更に高くなっていた。

薄っすらと眼を開けて小湊を見ると、外を見ながら硬直している。

怖がりの小湊にとっては、とても眠っていられる状況ではないのだろう。

それにしても確かによく揺れる。

そう思いながら私も外の波を見ていた。

するとまた大きな波がやってきて、それを乗り越えた瞬間船がジャンプした。

さすがに私も驚いたが、小湊は即座にクルッと振り返って私を見た。

その動揺ぶりに私は吹き出しそうになったが、なんとか堪えて眠っているフリをした。

その後も船がジャンプする度に小湊は私を見た。

いい加減私が寝ている事は分かってる筈なのに、必ずこちらを見る。

「これはコイツの本能なのか？」

「本能に勝てないのか？」

「どうしても見てしまうのか？」

そう考え始めたら段々小湊が小動物に思えてきて、笑いを堪えるのも限界にきていた。

そして今日一番の大きな波が来た。

それを乗り越えた時、足が床から浮くぐらい船が傾いてジャンプした。

すると小湊も今日一番のスピードで振り向いたので、私はとうとう吹き出してしまった。

「ぶははははは、いちいち俺を見るんじゃないっ」

「いや、だってさっきから船がジャンプしてますよ。怖くないんですか？よく寝ていられますねえ」

「島に着いて寝不足だと楽しめないから今のうちに寝といた方がいいぞ」

「とても寝られませんよ」

こいつに彼女が出来ない理由が少し分かる気がする。

男がこんなに怯えていては、隣の女の子は可哀想だ。

ところで「船がジャンプした」と言っているが、実際はジャンプしたわけではない。

波が大きいので乗り越える時に船首が浮き、その後着水した時の衝撃が大きいのでジャンプした感覚になる。

股間がスーっとするほど落差があるので、ジャンプしたと勘違いしてしまう。

高速船はフェリーに比べると小さくてスピードが出ているので、横から見るとまるでカスタネットを打っている様に波を乗り越えて進んで行く。

船首に近付けば近づくほど上下運動が激しくなってシーソーに乗っているようだ。

ん？そうか、そういう事か。

不正解が見えた。

カスタネットで例えると結んである付け根の部分が、船でいうところの船尾にあたる。

ここは上下運動の幅が狭い。

なので揺れは少ないが、船首の方は揺れが大きいわけだ。

お陰でさっきから股間がスースーしっ放しだ。

次回は後ろに乗る事にしよう。

そうこうしているうちに島が見えてきた。

目的地は慶良間諸島にある阿嘉島。

この島との出会いは10年前に遡る。

夏休みの旅行で、とある島へ向かったが何故か違う島で船を降りてしまい、偶然見つけた島だ。

1992年夏

当時バブルが崩壊し不況の波が迫っていた。

不況の波は業種毎に時間差で押し寄せ、私は建設業界いたためもろに打撃を受け、周りの会社も次々と倒産していった。

幸い私が担当していた取引先は1社も倒産しなかったが、上司や先輩の取引先が何社も潰れた。

当時の先輩の話では、

「来週集金に伺います」

そう言って次の週にその会社に行くと、もぬけの殻だったらしい。

焦げ付き（未収）を起こしてお金が入ってこなくても、下請け業者には支払わなければならない。

仮に1件の仕事で焦げ付きを起こすと、約3件分の利益が消えてしまう。

よほど骨太の会社でなければもたないのだ。
なので周りの同業者も何社か消えていった。
そうすると当然その下請けにも影響が出る。
正に連鎖倒産の幕開けだった。

それまでは毎年夏休みは海外へ行っていたが、そんな景気だったためその年は国内で過ごす事になっていた。
どこへ行こうか考えていた時、同僚が沖縄のガイドブックを見ていた。
それを借りて見ていたら、名刺サイズぐらいの小さな記事で「東洋一綺麗な海 座間味島」という文字に目が止まった。
「沖縄に東洋一の海、？」
国内にそんな所があったのか。
寝耳に水だ。
しかし情報量が少なすぎる。
座間味島までの行き方は書いてあったが、ビーチや宿泊所の情報は全く書いていない。
「取りあえず向こうに着いたらタクシーでビーチに行けばいいか、
そんな感じで軽く考えて、同僚と座間味島へ行くことにした。

座間味島は、那覇の泊港からフェリーか高速船で行く事ができる。
高速船で50分、フェリーだとその倍ぐらいかかるのだが、我々はお金を節約するためフェリーで向かった。

出港して1時間半、ほどよい船の揺れで二人ともウトウトしていたが、気がつくと港に着岸しようとしていた。
眠っていたら危うく降り遅れるとこだった。
降りたのは我々以外には地元の人が3人。
観光客は我々だけだった。
お盆時期なのに観光客が少ないのは、ガイドブックの記事が小さいからだ単純に思っていたが、実は少ない理由は別
にあった。
その理由とは、我々が降りた島は座間味島ではなく、阿嘉島という当時は全く無名の島だったのだ。
那覇の飲み屋で働く女の子10人(全員沖縄県民)に聞いても、阿嘉島を知っていたのはたった1人、それぐらい無名だ
った。
そして我々は、違う島であることに全く気付いておらず、疑おうとしなかった。

早速ビーチへ行こうと思い、フェリー乗り場で観光地図を探したが、そんな気の利いた物がありそうな雰囲気ではない
。
タクシーを探そうとしたが、タクシーどころか人っ子一人居なくてガランとしている。
まるで無人駅だ。
とてもタクシーが来そうな空気でもない。
少し辺りをウロウロしてみたが、半径100mには人がいない事がすぐに分かるほど、周りには何も無いのだ。
我々は呆然とした。

取りあえずフェリー乗り場に戻れば誰か居るだろうと思い、戻ることにした。

そしてフェリー乗り場に戻ってはみたものの、やはり誰もいない。
まるで「世にも奇妙な物語」の世界だ。

フェリーを降りた辺りに目をやると、サビサビになったコンテナがあった。

どうやらそこが切符売場らしい。

その人に聞いてみようと思い、コンテナをくり抜いて付けられたサッシ窓から中を覗き込んだ。

やっぱり誰もいない。

我々だけ完全に放置されてしまった。

「島に着いたらタクシーでビーチまで行けばいいか、とたかをくくっていたが、全く当てが外れてしまった。

全く観光化がされてなく、下調べ無しで来る島ではなかった。

途方に暮れていても仕方ない。

海沿いに歩いて行けばいつかビーチに辿り着くだろう。

そう思い、トボトボとふて腐れた小学生の様に歩き始めた。

1 kmぐらい歩いたらどうか。

海沿いに歩くつもりが地形的にそれができず、気が付くと海は視界から消え、左右には樹木が生い茂っていた。

「シャワシャワシャワシャワ、

前後左右から聞こえるセミの声に囲まれながら、キツイ登り坂を上がり、そして下った。

下り切った所で足を止めて思った。

「ホントにこっちで合ってるのだろうか？、

この先には次の登り坂が控えている。

選択を迫られた。

一旦フェリー乗り場に戻って違う道を進むか、それともこのまま進むか。

んー...

「シャワシャワシャワシャワシャワシャワシャワシャワ、

セミの鳴き声が頭の中に響いた。

そういえば機械音が聞こえない。

車の音も電車の音もバイクの音も聞こえない。

そんな世界はいつぶりだろうか。

東京生活が長いせいか、機械音の無い世界がとても新鮮だった。

そして自然の音しか聞こえない世界では、時が進んでいない様に感じた。

そうしたら、行くか戻るかで迷っている事がどうでもよく思えた。

「このまま進んでビーチが無かったら戻るだけか、

そんな風に思い、次の坂道を登り始めた。

坂の途中で後ろを振り返ると、今歩いてきた長い一本道がある。

その道を足下からずっと目で追っていくと、信号機も道路標識も無い。

そして700メートルぐらい向こうに、一つ目の坂の頂上が見える。

あんな遠い所に焦点を合わせるのも久しぶりだ。

いろんな事が新鮮に思えた。

そして二つ目の坂の頂上近づき、坂の向こうには海が見えるのだと期待をした。

しかし、その期待はもろくも消えつつあった。

頂上が近づくとつれ、その向こう側には樹木の先端が何本も見え始めた。

「まだ森の中か...」

さすがに少し気持ちが萎えた。

「いったい幾つの坂を越えればビーチに着くのだろう、

目の前に立ち並ぶ樹木を見ながらそう思った。

ところが、何処からかさざ波の音が聞こえてくる。

小走りで先へ進み、樹木の間から向こうを覗くと、そこには水色と青色が複雑にグラデーションがかかった東洋一の海があった。

それは私が今までに見たどの海よりも美しく、穏やかなさざ波が打ち寄せ、ゆったりと時間が流れていた。

波打ち際には沢山のサンゴが打ち上げられて山になり、打ち寄せる波を受けとめる様に土手となって波打ち際をどこまでも連なっていた。

そのサンゴの山に波が打ち寄せ、引いていく時にサンゴも一緒に「シャリシャリ」と音を立てて連れていく。

そしてまた次の波でサンゴが打ち寄せられる。

こんなのは初めて見た。

誰も見ていないのに、誰に向けてこんな演出をしているんだ。

何とも健気に思えた。

波打ち際を歩くと足はくるぶしまで埋まり、大粒の砂が程よい刺激になって気持ちが良い。

そのまま海の方へ進んでみた。

すると海中を素早く泳ぎ回る魚が、海面からでも見て取れた。

テンションが上がり、マスクとシュノーケルを急いで取りに走った。

そしてマスクを付けて海の中を覗き込むと、そこは天然の水族館だった。

赤、青、黄色の多種多様な魚たちがサンゴ礁の森を駆け回っている。

沖の方へ進むとサンゴ礁は更に立体的になり、山々を形成していた。

頂上付近で遊ぶ魚、崖の途中のサンゴを突く魚、麓の方でサンゴの裏にひっそりと隠れている魚。

テレビでしか見た事がない海の世界がそこにあった。

ダイビングのライセンスを取らないと見る事が出来ないと思っていたのに。

時が経つのを忘れ、夢中で海の中を散歩した。

そして気が付けば、太陽が随分傾いていた。

時計を見ると15:30。

昼食を取るのも忘れていた。

帰りの船に乗り遅れたら大変だ。

とても名残惜しいが切り上げてフェリー乗り場へ向かう事にした。

「シャワシャワシャワシャワ、

帰りもまたセミの声に囲まれて、来た道に戻った。

来る時に、行くか戻るかの選択を迫られた場所でまた足が止まった。

森の中からこちらをジッと見ている動物が居た。

それはケラマジカだった。

元々はこの島には居なかったらしいが、昔誰かが持ち込み野生化したらしい。

野生の鹿を見るのは初めてだったから感動して大声を出しそうになったが、逃げられないように声を殺しながら興奮した。

向こうはこちらをジッと見て警戒してるようだ。

ゆっくりと2、3歩近づいてみた。

ピクッと反応した。

更に2歩近づくと、ピョンピョンと跳ねて森の中へ消えてしまった。

海だけでなく森にもこんな野生動物が生息している事を知り、自然の豊かさにまた感動を覚えた。

出航時刻の10分前にフェリー乗り場に着き、防波堤に腰を下ろし海を見ながら船の到着を待った。

「今日は凄い一日だったなあ」

単純な言葉が口から漏れた。

今日一日の出来事が情報量としてあまりに多過ぎて、適当な言葉が見つからなかったのだ。

そしてその出来事は鮮烈に残った。

「座間味島かあ。いい島を見つけたなあ」

そう、この時点ではまだ座間味島に居ると思っているのだ。

本当は阿嘉島なのに。

そして出航の時刻がやってきた。

しかし船はやって来ない。

「船遅れてるなあ、

と思いながら待つが、船は一向にやって来ない。

さすがに痺れを切らして切符売場の人に聞いてみた。

「船はまだですか？」

「切符を見せて下さい。ああ、この船はもう出ちやったよ」

「えー。僕ら10分前から待ってたのに、出ちやったってどういう事ですか」

「お客さん、これ座間味島からの切符だよお」

「そうですけど？なにか？」

「ここ阿嘉島だよ」

「えっ？アカジマ？どこそれ」

「だからココ」

初めて聞く島だった。

丸一日遊んで、最後の最後で違う島に居る事を知った。

こうして私と阿嘉島は、間違えて船を降りた事に出逢った。

そしてまたあの天然水族館のような海を見たくなり、今回10年ぶりに訪れる事になった。

10年ぶりに見た天然の水族館に落胆

「ところで上杉さん、そんなに気に入った島なのに何故10年も行かなかったんですか？」

「俺10年前にその島に行ってな、翌年結婚したんだよ。女房は根っからのインドア派でさあ、海には興味ないって行きたがらなかったんだよ」

「そうですねえ、上杉さんの奥さん運動とか大嫌いでしたもんねえ。それで何故今回は一人だけ...ハッ」

「ハッ、じゃねえよ。お前絶対ワザとだろ。そこまで話さないと気づかないか？普通」

「いや、ホントに忘れてました。すみません」

私は2カ月前に離婚したばかりだった。

久しぶりに独り身になったので、あの時の天然水族館をどうしても見たくなり、小湊を誘って向かう事にしたのだった。

泊港を出航してから45分、船がスピードを落とした。

小湊は相変わらず青白い顔をしている。

二日酔いなのか船酔いなのかももう分からなくなっていた。

窓の外に視線を移すと、阿嘉島が見えてきた。

ゝボーーーーッ　ボーーーーッ、

港へ入る汽笛が鳴ると、待ち切れなくなって甲板へ出た。

そして10年ぶりに見た阿嘉島のフェリー乗り場は、以前のイメージとはかけ離れていた。

切符売場だったサビサビのコンテナは無くなり、地面は綺麗に舗装され、乗船する所に屋根ができていてとても近代的になっている。

10年というゝ時の流れ、を感じた。

船を降りる人の数も、あの時は3人しか居なかったが今はとても数えられない。

何十人もの人がゾロゾロと降りている。

「小湊行くぞ」

「はい。観光化がされてないって聞いてましたけど、随分賑わってるじゃないですか」

と言ってきたが、私はあまりの変わり様に愕然とし、言葉を返すのを忘れていた。

我々も下船する人達の行列に並び、阿嘉島に降り立った。

「10年経つと随分変わったなあ」

「そんなに変わったんですか。うゝ気持ちが悪い」

綺麗に舗装された道を歩いて行くと、地面に文字が書いてある。

なにになに？

ゝようこそ 座間味島へ、

「あれ？座間味島？しまったまた島を間違えた」

「何やってんですかあ。おゝえ...」

「どうりで変わってる筈だ。だって違う島だもん。ハハハ」

「笑ってる場合じゃないですよ。早く戻らないと船出ちやいますよ。もゝ」

我々は人の流れを逆走し、急いで船に戻った。

再度乗船すると船はすぐに動き始め、座間味港をあとにした。

ホンの一瞬だったが、10年前の目的地に足跡を付けることができた。

海はエメラルドグリーンからブルーへ変わり、水深が深くなったのが分かった。
やがて進行方向に対して2時の方向に小さな無人島が見えてきた。

「あのビーチに行ってみよう」

そんな好奇心をそそられるビーチが見える。

安慶名敷島（アゲナシクジマ）だ。

島を1周するのに20分もあれば充分なくらい小さな島だ。

阿嘉島から泳いで行けないものだろうか？

距離は1kmぐらいだ。

「ヨシ、今度挑戦してみよう」

一瞬そう思ったが、昔観た映画で、この辺りは海流が速いから泳いで渡るのは厳しいと言っていたのを思い出した。
しかしその映画では犬が泳いで渡っていた。

犬がだ。

犬を馬鹿にするわけではないが、犬掻きよりは私の方が泳ぎは勝っていると思う。

昔は「河童のジョー」と呼ばれていた。

あれ？河童と犬だとやはり河童の方が上だろうか。

河童が遠泳をしているイメージはあまりない。

背中に背負った甲羅が重くて途中でバテそうだ。

それともあれは背負ってるのではなくて一体型か？

一体型ならばあれが浮力となって遠泳向きの気がする。

となると河童の勝利だ。

いや、そもそも河童は川にいるから淡水系だ。

海水では頭の皿に何かしらの影響を与え兼ねない。

やはり河童の負けだな。

そんな事を考えていると、海の色がまたエメラルドグリーンへ変わっていた。

阿嘉港へ入港だ。

甲板から見る10年ぶりの阿嘉島は変わっていなかった。

サビサビのコンテナ、待ち合いの古びた椅子も健在だ。

下船する人もチラホラという感じで、以前と比べると多少増えてはいるがまだまだ手付かずの島の雰囲気は漂っている。

ん？

阿嘉島の隣には人口100人足らずの慶留間島があるが、そこと阿嘉島の間には橋が架かっている。

10年前はこんな橋無かったぞ？

あったかなあ？

いや、やっぱり無かった。

これは島の人にとって大きな変化になっただろう。

慶留間島にはフェリー乗り場が無い。

今までは船で阿嘉島へ渡っていたが、これからは自転車で渡れるわけだ。

一番喜んだのは慶留間島の人達だろう。

我々は船を降りると、いくらか顔色が良くなった小湊が久々に口を開いた。

「へえ～、ホントに何も無さそうな島ですね。」

小湊は初めての阿嘉島だ。

「昼飯を食べる所とかあるんですか？」

「1箇所だけあるらしい。インターネットで検索しても阿嘉島の情報は殆ど無いから見つけるのに苦労したよ」

「コンビニはあるんですか？」

「コンビニは無い、商店はあるけど。ビーチには海の家とか売店が無いから飲み物と何か食べる物でも買って行こう」

10年前の記憶を振り絞って垣花商店を探したが、全然違う所を彷徨っていた。

「確かこっちの方だったと思ったけど・・・」

すると小湊が疑うような声で言った。

「あれえ？あそこにあるのコンビニじゃないですか？」

小湊が指す先を見ると確かにコンビニらしき店があった。

「辰登城」と書いてある。

「タツノポリシロ？・・・タツノポリジョウ？・・・何て読むんだ？ タツトウジョウか」

正解はタツノジョウだ。

ここは2階3階が民宿の客室になっていて1階がコンビニになっている。

正確にはコンビニの定義に当てはまるのか分からないが、品揃えは良くてとても便利そうだ。

「昨年オープンしたらしい。」

そこで魚肉ソーセージと水を購入しニシバマビーチへ向かった。

「シャワシャワシャワシャワ、」

全身に降りかかるセミの音が暑さに拍車をかけていた。

一つ目の登り坂を上がった所で小湊が足を止めた。

目の前にはニシバマビーチへ続く一本道が見える。

10年前の景色と何も変わっていない。

違うのは、あの時はビーチへの道がこれで合っているのか疑いを持ちながら歩いていたせいか、坂道がとてもキツく感じたが今回はさほど感じなかった。

「ハアハアハア、上杉さん、まさかこの道をずっと行くんですか？」

道は1本しか見えないから99%この道である事は分かっているのだろうが、この先何百メートルも続く道を目の当りにして気が遠くなり、残りの1%に賭けて聞いてきた。

「そうだよ」

この後の小湊の弱音を受け付けなくなかったのも、「辛いと思っているのはお前だけだよ」と言わんばかりにアッサリと答えてやった。

「ハアハア、そうですか」

そう言ってまた歩き始めた。

そして坂を下り切った時、前回ここでケラマジカを見つけたのを思い出した。

また居るだろうか？

確かあの森の辺りだ。

一時停止ボタンを押した様にピタリと静止し、眼だけを動かしまるで獲物を狙う様に探した。

「シャワシャワシャワシャワシャワシャワ、」

BGMのセミの音が視界に覆い被さり、実際は揺らいでいない森がカゲロウで揺らいでいる様に見えた。

そして、自分がドキュメンタリー番組で幻の鹿を追う主人公になった気さえした。

頭の中では低い声のナレーターが、

「灼熱の太陽の下、上杉は森の中へ鋭い視線を送っていた。どんな小さな動物も見逃さないという殺気が、レンズを通して伝わってきた」

こんなシーンが頭の中で放送されていたが、それを小湊がぶち壊した。

「上杉さん、何やってんですか。早く行きましょうよ」

私の殺気はコイツには届かなかったようだ。

「鹿を探してたんだよ」

「こんな所に鹿が居るわけじゃないじゃないですか」

阿嘉島の事をよく知らないくせになぜ自信満々で否定できるのか。

私がボケたと思って突っ込んだつもりなのか？

それにしても全く面白くない。

小湊はこういった事がちよいちよいあるが、6年の付き合いでもこの根拠のない自信は理解に苦しむところだ。

そしてまた歩き始めた。

少し歩くと後方から、

「プップー、

軽自動車のクラクションが鳴った。

「乗って行きますか？」

ダイビングショップのお兄さんが、これからニシバマビーチに行くので便乗させてくれるというのだ。

我々はお言葉に甘えて乗せてもらう事にした。

そしてあっという間にビーチに着いた。

ビーチを隅々まで見渡したが誰も居ない。

我々と乗せてきてくれたお兄さんが居るだけだ。

天然の水族館と言えるビーチが世間では全く知られていないのは、勿体無いという気持ちと誰にも教えたくない気持ちが入り混じって複雑だった。

早く10年前の感動と再会がしたくて急いで準備をしていると、いち早くマスクとシュノーケルを付けた小湊が波打ち際で、

「上杉さん、あの岩場の辺りに行けば魚が居ますか？」

と聞いてきた。

「そんな所に行かなくてもすぐその辺に居るよ」

と言って波打ち際から5m位の所を指した。

すると、「マジですか」と笑いながら海に顔を付けた。

3秒もすると海から顔を出し、

「凄いですねえ、メチャクチャ居るじゃないですか」

と興奮しながら言ったかと思うと、こちらの返答を聞かずにもう泳ぎ始めていた。

私も急いでマスクとシュノーケルを付けて飛び込んだ。

ところが.....

確かに魚は居る。

でも気のせいか数が減っているように思える...

更に沖へ進んだ。

なんだ？これは...

サンゴが骨の様に白くなって生気を感じない。

まるで白黒の世界じゃないか...

あたり一面、まるで白骨化した動物の死骸が捨てられている様だ。

それは、いわゆるサンゴの白化現象だった。

地球の温暖化によりサンゴが白くなったというニュースを何年か前に聞いたが、自分には関係ない事だと思ってあまり気に留めていなかった。

しかし現実を目の当たりにし、計り知れない衝撃を受けた。

見れば見るほど自分の鼓動が速くなっていくのが分かった。

10年という月日による思い過ごしや勘違いというレベルではなく、明らかに別世界だと思った。

岸へ戻ると小湊が、「いやあ、ホントに凄い魚の数と珊瑚ですね」と興奮している。

他の海に比べれば確かに凄いと思う。

しかし私が見た昔の景色とは全く違うのだ。

小湊の興奮に水を差したくないので、喉まで出かかった「サンゴが死んでる」という言葉は呑み込んだ。

このビーチにはまだ観光客が少ない。

これからもし観光化が進んで人が沢山来たらどうになってしまうのだろう。

サンゴが激減したとはいえ、他の島に比べればまだまだある方だ。

これ以上減らさないために自分に何ができるのだろうか。

自分が何か罪を犯してしまった、そんな風に追い込まれた気持ちになった。

沖縄は海と空で出来ている 【第1話】 偶然見つけた天然の水族館

<http://p.booklog.jp/book/100715>

著者：ジョージ・スギーニー

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/george5/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/100715>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/100715>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ